中國性文化の本源

The Origins of China's Sexual Culture

秦　莉芳
Qin Lifang

文化と基礎文化

文化は人類現象の一種で，その存在は人間と動物との基本的な区別の一つである。ある意味では，人類というのは動物と文化の統一体である。人類の発展と進歩には生理上の要素もあるが，文化の発展と進歩に表されているものがさらに目立つ。文化の発展と進歩は人類の過去と現在を反映し，人類の明るい未来をも代表しているのである。

残念ながら，人類は自身に対する認識はあまりにも不足で，性文化に対する認識も実に足りないのである。人々は客観的世界の研究を重視し，自身に関する研究を忘れ，現在だけを研究し，過去と将来の研究を疎かにし，文化のある方面を研究し，その他の方面を無視しがちである。そのため，文化の問題においていまだに誤謬が多数残っており，黒い雲に覆われたままである。勿論，文化の問題の範囲が広く，複雑で，冒頭からその意味の解析を行い，拙論の趣旨を明らかにすることも十分必要性があるといえよう。

一，文化の概念

文化という概念の形成には，長い間の歴史的進化を経ているのである。

西洋では，「文化」の語源は英語の“culture”にあり，“culture”の語源はラテン語の「栽培」，「耕作」という意味の“cultus”にある。16世紀から17世紀に至って，“culture”という言葉には「養成」，「文化的修養」の意味も加わった。

中国では，中国語から見れば，「文」という文字は交差している線からなり，万物が互いに交差している意味を表している。「化」という文字は「人」と「七」からなり，「七」は振り返って人に従う意味で，「化」には人々を善行へと導く意味が含まれている。このように「文化」という言葉を文字学から説明すれば，「教化」，「修養」の意味になり，“culture”にも通じているのである。

中国の古典には「文化」に対する解釈も数多くある。『易・黄卦・象伝』には，「観乎天文，以察時変；観乎人文，以化成天下。」との内容がある。ここの「人文化成」は即ち中国語の「文化」という言葉の源である。唐・孔穎著『周易正義』の解釈によれば，「人文化成」には二つの内容があり，つまり，典籍（例えば『詩』，『書』，『礼』など）と礼儀風俗である。こういう見方は西漢から近代にかけて続けられてきた。

19世紀以降，人々は文化の研究を重視するようになり，文化の概念に関する論述も多く現れた。例えば，スペンサーが社会と生物体との違い，いわゆる「超機体」に関して述べたとき，人種誌の材料を応用し，文化の研究を提出した。イギリスの学者タイラーはダーウィンと共に人類進化に関する著作を発表すると同時に『原始文化』という本を出版し，現代の人類学者に経典とされている文化の定義を打ち出した。それによると「文化は複雑な総合体であり，知識，信仰，芸術，道徳，法律，風俗及び社会における人類のすべての能力と習慣を含めている。」[1] この定義は主に，人類の意識的活動とその産物を文化の範疇に入れ，文化と人類の生活とをほぼ同一視している。

20世紀60年代半ば頃まで，文化という言葉は一般的に「人類が社会歴史実践において創造した物質的な富と精神的な富の総括である」[2] と定義されていた。60年代半ばから，学術の世界における文化に対する理解が広義と狭義の二つの方向に向かって動き出した。広義の文化概念は従来の内容をさらに拡大し，人類が創造した自然界と違うすべてを文化と見なし，物質と意識活動によって得られた成果だけでなく，各種の社会現象，社会過程と社会的な物事もその中に含まれる。ラルフ・リントンがその著書『個性の文化背景』の中で次のように述べている。「文化というものは，一般的に公認されているより上品，より優雅な気持ちを与えるその一部分の生活様式だけでなく，如何なる社会のすべての生活様式を指している。」[3] それに対して，狭義の文化概念は従来の内容をさらに縮小し，文化を意識の生産に直接つなる意識生活と意識成果に限定してしまった。

文化というのは周囲の物事に対する人類の認識と改造であると考えてもよいだろう。「周囲の物事」とは広かったり狭かったりし，絶えず発展している概念で，原始時代の人々の百里足らずの生活範囲，「飲食」，「男女」など最も基本的な欲求と考えてもいいし，宇宙の天体，原始，分子など拡大された「周囲の物事」と見ることもできる。「認識」は意識活動，意識文化の一種で，「改造」は実践行為，

行為文化の一種である。こうして，文化のあらゆる方面を一括することができるかもしれない。

文化に対するさまざまな認識と理解の背後に，基本的な一致性と共同性の存在も否定できない。文化に関するどの定義でも，文化と人類との不可分性を認めている。人類を離れた文化も，文化を離れた人類も存在しないと，誰でも認めている。文化は自然の産物ではなく，人類の創造性と離れられず，人類によって創造されたものである。こういう文化に対する理解の一致性は非常に重要なもので，その指導のもとで，人々は絶えず文化を創造し，発展させ，明るい未来へと向かいつつあるのである。

二，本源文化と自由文化

文化の内容から見れば，本源文化と自由文化に二分することができる。前者は人類の二大基本欲求に直接つながる文化で，人類文化の基本的出発点であり，後者は人類の発展され，昇華された文化である。人類は宇宙万物をより深く認識することによって，より大きな自由を獲得するようになるのである。[4]

本源文化というのは，人類の最も基本的な欲求の満足から出発し，建てられた一種の文化のことである。人類の最も基本的な欲求は飲食と性で，人類は飲食を通して生存を維持し，性によって子孫の繁殖を続ける。これは本当に人間の最も低く，最も基本的な生活欲求で，これがなければ，人間には滅亡の道しか残っていない。この点について，人間と動物の間に変わりはない。つまり，人間の最も基本的な欲求は同時に一種の自然性，動物性，あるいは本能と言ってもよい。人間の動物的本能の実質は生存であり，すべてが生存のため，そして生存を発展させるためである。

しかし，動物的本能は文化ではない。すべての動物的本能は環境に適応することだけであり，それに対して，文化というものは環境を認識すること，そして改造することと現れている。人類には客観世界に対して，ほんの少しの思考，ほんの僅かな認識，ただ少しだけの改造さえあれば，文化が生まれたわけである。その認識がいくら幼稚，浅薄だといっても，その改造がいくらささやかだといっても，文化の誕生である。

人類は類人猿から進化してきたので，類人猿と比較することができる。類人猿時代において，文化はまだ生まれていなかった。類人猿はその動物的本能しか持っていなく，それにより自然環境の中で生存していた。類人猿の動物的本能には主に，飲食，居住，性，自衛などがあり，最も基本的なのはやはり飲食と性である。類人猿から人類へと進化する過程では，文化が生まれ始めた。最初の文化現象である道具は人間の器官の延長として現れてきたものである。木の枝，棒，石の斧などみな人間の手の延長であり，丸木舟を利用して，水面に浮かぶための苦労もなくなった。これらはすべて人間の動物的本能の補足と延長であり，文化はまさにこのように人間の動物的本能が補足，延長されつづける中で，現れてきたわけである。

棍棒を使って木の実を落としたり，丸木舟に乗って川や海を渡ったりすることは，小さいながらも，環境に対する改造である。環境を改造するためにはまず必要なのは環境を認識することで，つまり，人間の行動は既に意識に支配されるようになったわけである。人間は如何に食物を手に入れるかという問題を考えるにとどまらず，性行為に関しても考え始めた。こういう考えに基づき，人類は長い原始時代の中で，少しずつ性交の範囲を制限するようになり，さらに性への崇拝現象も現れてきた。こうして，性の文化も生まれてきたわけである。

物質生産面の文化と性の文化とどちらが先に生まれたかという問題を証明する資料はいまだに不足の状態であるが，一般的に見れば，物質生産面の文化は蒙昧時代の初期に生まれ，一方，性の文化はその時代の中，後期に至って初めてはっきりとした表れが見られるようになった。なぜなら，人類にとって第一に満たさなければならないのはやはり生存，飲食のことで，性はその次になる。しかし，物質生産面の文化と性の文化の出現順番にはかかわりなく，両方とも人類の二大基本的欲求から生まれた本源文化であることは間違いない。原始社会の人にとって，満腹することと性交すること以外には他の欲求がなく，それ以外に他の快楽もない。彼らの考えている，注目していることは主にこの二つの面にかかわり，それによって本源文化が生まれるようになった。今日まで残されてきた先史時代の岩壁画には，原始人の生活ぶりが描かれていて，その内容もさまざまであるが，分析してまとめたら二つの種類に過ぎない，つまり，物質生産の活動と性の活動である。

本源文化は人類の飲食と性の二大本能に密接につながっているが，本源文化は決して本能とは同じではない。本能は文化ではなく，生まれつきの性能で，遺伝を通して獲得することができる。それと違って，本源文化は生まれつきのものではない。それは遺伝構造には存在しなく，社会生活の中に存在し，上の世代から下の世代に伝えられる（或いは下の世代に影響を与える）だけである。例えば，飲食文化は飲食本能と違い，前者は後者を元にして発展してきた文化システムで，飲食に関する知識，礼儀，風俗習慣及び各種の関係などが含まれている。生まれたばかりの人間には飲食の生理機能と欲求があるだけで，飲食の文化を有しない。また，性の文化は性の本能と違い，前者は後者を元にして発展してきた文化システムで，性の知識，観念，関係の法律制度などが含まれている。生まれたばかりの人間には性の生理機能と自然欲求を持っているが，性の文化

を持っていない。

なんと言っても，本源文化はわりとレベルの低い文化である。なぜなら，それは人類の最も基本的な欲求を中心にして生まれ，発展してきたもので，いくら発展しても，とうてい直接によりよく生存するためであり，この世代と次の世代の生存のため，つまり繁殖のためであり，この極限を超えることができないからである。人類にとって，もう一種の高いレベルの文化も存在する。それは本源文化をもとに無限に発展してきた自由文化である。このレベルの文化は直接或いは間接に人類の生存のためではなく，客観的世界を改造，支配し，無限の空間の中で無限の自由を追求するためである。人類というのは改造の力を有する物質形態であり，物質世界の進化により，困難且つ光栄な使命，つまり，自然界の改造と新世界の創造が与えられている。古い世界にとって代わる新しい世界は文化の世界であり，自由文化はこの新しい世界を作り出すために生まれてきたものである。人類は動物と文化の二つの面から作り出されたものである。文化は動物につながり，本能をよりよく発展させ，即ち本源文化であると同時に，より高い方向に向かって発展し，人類の進化において絶えず自生力を強め，最終的には人類を分離させ，自然界に代わって新しい世界を作り出し，つまり自由文化である。

自由文化は人類の未来で，人類文化発展の先導でもある。しかし，この変化も本源文化の役割を抑えることができない。それが人類生存と発展の基礎であるから。人間はまず動物として存在し，最も基本的な欲求は飲食と性である。もし本源文化によって提供された最も基本的な生存条件がなければ，さらに高いレベルの文化活動を行うことも不可能になる。採集時代の原始的文芸活動も飲食にある程度の保証ができたあとに生まれたもので，性の活動とも深くつながっている。現代社会においても，民衆はまず生存の条件を確保したうえで，政治，科学研究，文芸など高いレベルの文化活動を行うのである。人間には動物の本能がある限り，本源文化は人類生存と発展の基礎条件である。それを離れたら，他の如何なる活動も存在，発展できなくなる。本源文化を研究しない限り，自由文化への理解も不可能であり，人類の現在と未来を正しく認識することもできない。

三，動物性と文化性の統一

人間は動物性と文化性の統一である。古代ギリシアの哲学者アリストテレスが「人類よ，君自身を認識せよ」と言った。人類はどの面から自分を認識すればいいかについて，いろいろな説が多々あるが，その本質的な問題は自分の動物性と文化性，そして両者の関係と発展を認識することにあると言えるだろう。

早期の人類文明において，人々はよく，自分のことを動物と比較していて，自身への認識を確立しようとした。古代ギリシアでは，哲学者がこういう認識を論理化させるようになった。例えば，プラトンは最初に人類と動物を同じく生物と読んでいたが，晩期になって「人間は羽毛のない二本足の動物である」という有名な説を打ち出した。でも，彼は人間と動物を絶対的に同一視しなかった。彼は人間は霊魂と肉体，精神と生物の統一であると考え，肉体は死亡により腐ってしまうが，霊魂は天に上り昇華されることができる。こういう考え方は近代，現代に至るまでその影響を及ぼしているのである。

近代の自然科学が興り，特に，生物学が迅速な発展を遂げたあと，人類の自身に対する認識も科学の時代に入り，それに従って，人間に対する生物学解釈も発展してきた。生物分類学者リンネがその分類学説の中で，人類を動物の一種に並べ，動物王国の頂上に位置付けた。彼は人類には才知と理性があり，他のすべての動物より上だと思っている。

ダーウィンにより創立された生物進化論と人類起源説はさらにこの面の理論と認識を発展させた。その理論によると，すべての生物は進化によって現れてきたもので，自然の選択の中で淘汰され，適者生存となり，単一の原始生物から今のような生物世界となった。人間は類人猿から進化してきたものである。生物進化論の最大の貢献はつまり，発展の序列において人類と動物を結びつけたことである。それから，人類を動物の一種として研究することは既に人類研究の重要傾向の一つとなった。

現代社会では，人類に関する生物学研究には主に二大流派がある。一つは社会生物主義でもう一つは生物人類学である。社会生物主義の観点から見れば，人間の本性は遺伝子によって決められているのであり，本当に人類の本性及び法律，観念，制度，両性関係などを認識するには皆，遺伝子――遺伝物質の基礎の中に原因を探さなければならない。例えば，1975年，アメリカの社会生物学者は『社会生物学：新たな総合』という著書の中で，生物進化論の原則を階級，宗教，道徳などの文化現象の研究に運用することを提唱した。この学説は生物学レベルから人類行為の根源を探ることを試みた。そこには取るべきところはあるが，行き過ぎていて，人類の文化性要素をすべて生物特性に還元することができないという点に気づかなかったのである。

生物人類学も生物学の領域から人類と動物の区別ポイントを探るのであるが，その観点によれば，生物の領域では，動物の本性は既に特定化していて，既に環境に適応してしまった。それに対して，人間の本性にはまだ特性化していないものが多く，絶えず発展，創造する必要があり，この

ような人間の生物性の不足を補う活動こそ人類文化の創立前提となったのである。動物がその本能によって適応した自然環境に面しているといえば，人類のまだ未確定の生物性から人類が面しているのは文化環境であることになる。この理論は社会生物主義よりずっと深入りしているが，文化を自然本性の「補足要素」としか見ていないところに不足があり，文化の独立性と決定的意義への認識がまだ不足である。

社会生物学と生物人類学とまったく反対に，ほとんど人類の生物性を否定した観点もある。それによると，人間は動物と違う社会存在で，その本性は社会性であり，動物性は既に人間の主な特性ではなくなった。人間のすべては皆後天的社会性によって決められているものである。この観点は人間と動物の区別を見出し，正しいといえるが，しかし，人間と動物のつながりを無視してしまった。

人間は動物と文化の二重要素から成り立った複合体であることは否定できない。人間は動物世界から来て，文化世界へと向かうのである。人類の動物性は独立した純粋の動物性ではなく，文化性の制約を受けた動物性である。同時に，文化性も独立した純粋の文化性ではなく，動物性の制約を受けた文化性である。この意味からいえば，人間は二重性のある存在物で，どちらの面を失っても人間として成り立たなくなる。

もちろん，人間にとっては，その二重要素は永久に変わらないものではない。人類発展の早期では，動物性は文化性よりはるかに大きかった。その後，文化性が少しずつ浮かび上がって，動物性とほぼ同じようになった。人類が発展すればするほど，文化性の占める割合が大きく，最後に動物性をはるかに越えるようになった。個人の一生から見ても，似たような状況が見られる。幼児期には，動物性が文化性よりずっと大きく，年の成長につれて，文化性の割合も大きく変わっていく。

人類の動物性と文化性は人間の一身に統一されていると同時に，絶えず争っていて，矛盾している。この矛盾は解放と束縛，個人と集団，現在と将来，享楽と創造の争いとなって現れているのである。

動物性のせいで，人間が個人の快楽と満足だけに目を向け，他人，社会，将来を忘れがちである。人々はよく犯罪者を「禽獣」と罵り，つまり，その人は動物性によって行動したという意味である。また「人間ではない」と罵ることもあり，つまり，人間なら文化があり，文化があるならそのようにしなかったはずである。「悪を学ぶことは善を学ぶことより易しい」という言い方があるように，「悪」というのは人間の動物性に従って行動することで，個人の本能的欲求を満たすために任意に行動すればよく，苦労して学習，改造する必要がない。ここで指摘すべきことは，人間はなんと言っても人間で，その行動には動物性しかないことはなく，多かれ少なかれ文化性の要素もあり，悪いことをする場合も動物性の支配のほかに，文化要素の中の消極的影響もあるということである。例えば，婦女暴行の場合，犯人の動機はまず動物性の発散であり，また同時に「女性は男性の遊び物である」という観念から来たものもある。この観念は消極な物であるが，文化の一種でもある。また，殺人者の場合もそうである。例えば，中国に対する侵略戦争の中で，「殺人試合」を行った二人の日本軍少尉がいて，それぞれ百人以上の中国人を切ってしまった。これは明らかに動物の残虐さの現れであり，虎が自分の取った獲物を噛み殺すようだった。しかしこの中にも一種の観念が存在し，「中国人は劣等民族であり，中国人を一人殺すことは鶏を一羽殺すことと同じだ」ということである。これも一種の文化で，弱肉強食と種族差別の侵略者観念である。もちろんそれは反動的で，極めて有害なものである。

動物性と逆に，文化性は人間を個人の満足と享楽から離れさせ，無限に広大な空間へと向かわせるのである。人間の動物性の発揮と満足は文化性の存在により健康な軌道に導かれ，同時に，人間も文化性により動物性の制限から解放され，創造へと向かいつつある。文化の天職は創造にあり，文化を通して，物質世界も変わり，豊かになり，自然の物質が大きな飛躍を遂げ，それはより高いレベルの発展である。人類の歴史の中で，人間はいつも文化創造の力を発揮し，個人の範囲と享楽の天性を破り，絶えず前進しつつあるのである。

いくら人間の文化性が重要だといっても，動物性とそれにつながる本源文化は最も基本的である。人間はまず動物であり，もし飲食，性，居住などの生活がなければ，人類の生存と存続が不可能となり，より高いレベルの文化も絶対存在できなくなる。文化の進化から見れば，まず本源文化があってから自由文化がある。本源文化の存在と発展は自由を追求して自由文化を創造するための基礎作りと条件を人々に提供したのである。

本源文化は人間の動物的本能を基礎に生まれたもので，例えば，類人猿の前肢には物を握る本能があり，飲食に対する本能欲求がその本能を促進した。類人猿は果実を取るために棒を握り，獣を獲得するために石の塊を握った。それで道具が作り出され，食物を獲得する飲食文化も生まれた。自由文化は動物本能によって直接生まれることは不可能で，本源文化を基礎にしなければならない。例えば，類人猿は食物をとる活動の中で前肢の機能を鍛え，さらに自由文化の創造に重要な条件，つまり敏捷な手を提供した。食物を獲得する労働と火の発明により，飲食の範囲が開かれ，人類の体質にも大きな進歩ができ，自由文化に最も重

要な条件，大脳を提供した。原始の初歩の道具は皆食物の獲得のために作り出されたもので，これらの初級の道具からさらに複雑な高級道具と自由文化が作り出された。

本源文化と自由文化の境界線は固まったものではなく，お互いに転化することもある。最初にただ飲食，性などの本能のための文化が，後に自然を改造し，支配する自由文化と転化することは既に文化発展の規律となった。人類はこの転化を促進することに努力すべきである。同時に，自由文化が本源文化へと転化することもあり，それが一種の進歩であるときもあれば，退化であるときもある。例えば，人類は生物工程の能力を利用し，食物の生産に使い，伝統的な食物の獲得方法を改善し，人類の自由度を大きく高めた。これは進歩である。しかし，人類が新しい技術を身に付けてから，それを自身の発展に使わず，お互いの殺し合い（つまり動物的な攻撃）に利用すれば，後退としかいえないのである。原子工程，情報工程，遺伝子工程等，みんなそうである。

注：

1　タイラー『原始文化』。劉達臨『性と中国文化』（人民出版社1999年1月第1版3ページ）より引用，中国語から転訳。

2　『簡明哲学辞典』53ページ。韓民青『文化論』（広西人民出版社1989年5月第1版4ページ）より引用，中国語から転訳。

3　韓民青『文化論』（広西人民出版社1989年5月第1版5ページ）より引用，中国語から転訳。

4　本源文化を本能文化という人もいるが，実は，本能と文化は真っ向から対立している概念で，関連してみることは不適切なように思われる。